

新学校点描

26日、夜空を見ながら皆既月食を眺めていました。少しずつ満月に膨らんでいく姿は理科の教科書の月の満ち欠けそのままです。

《K中学校》

NO.4 R3. 5. 27

担当：校長

SNS利用で心配なことがわかりましたので、21日は授業をカットして、初めて全校集会を持ちました。顔を見たこともない第三者からダイレクトメールをもらって、返信を返していました。場合によっては何らかの要求をされていたり、そんな迷惑行為を受けていた生徒が全校で12.5%いました。共通しているのは、第三者の相手に対して無警戒に信じ込む姿です。今の中学生は、生まれたときからスマフォがありインターネットでの人の交流がありました。ネットの世界には自分をよく理解してくれる人が多いと感じているかもしれません。犯罪は、そんな気持ちをうまく利用してきます。今週も、SNSについての何かしらの教育を行つもりです。

大瀬校長先生

S先生からM高校に行って卒業生を見てきたことの報告を受けました。どの卒業生も充実した高校生活を送っていることを聞いてほっとします。中学校では、休みがちだった生徒も休まずに登校しているようです。高校に入ってから、がらっと変わる生徒が毎年います。そのたびに、中学校生活にある息苦しさはどこからくるのだろうと思うのです。

中学校で勤務していると、『生徒の○○さんが「むしゃくしやして、死にたい。」とか「誰もわかつてくれない。」とか言っていました。』と困った顔で教員が報告にくることがあります。何にむしゃくしやするのでしょうか。友人との間のこと？勉強の悩みのこと？家庭でのこと？はたまた恋愛のことでしょうか？SNSで見ず知らずの人とつながることが問題になりましたが、大人に近づくにつれこの手の問題は聞かなくなります。

その校長先生は、わたしにこう語りました。

「自分でこうしようと思ったら、たったひとりでも始めなきやだめ。そのための孤独には耐えなければいけない。ただ、孤立しちゃいけませんよ。『孤独』というのは、自分がやっていることに理屈をつけながら自信を持って行動していくことで、『孤立』っていうのは、自分から閉じていくことなんですから・・・。実際、孤独の中でひとり考え、がんばっている人は、いっぱいいます。」

その校長先生とは、神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校の大瀬敏昭先生とおっしゃいます。昔、わたしは、自分の勉強を兼ねて、神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校に1週間通いました。あの、サザンオールスターズの桑田圭祐の生まれた地です。茅ヶ崎駅を降りると、サザン通りなんて名前のついた通りがあります。

わたしが、この地に来たのは、1冊の本がきっかけです。もっと子どもを中心とした学校を作りあげようという話の本です。書店で手にしたその本は、当時のわたしの心の中にあった、もやもやを晴らしてくれた本だったのです。当時NHKの番組が、この小学校の軌跡について1年間取材し、番組を放送したほどです。

この校長先生は自己でも授業をします。わたしが見たのは、子ども達の飼育していたベッカムという名のカマキリが死んだ話。そのカマキリの死と残ったベッカムの卵から“いのち”を考えさせているようです。『命の授業』をしているのです。どの子も、しっとり落ち着いた姿勢で、校長先生の静かな声に耳をすます。

校長先生の熱意は、しばらくすると他の先生方にも伝わります。わたしが行った頃には、どの先生も、大瀬校長の素晴らしい、自分を変えた先生だと語ってくれました。

1週間通い続けたわたしに、せっかくだからと、校長先生がわたしを校長室に呼んでくださり、いろいろな話を聞かせてくれました。その時に出てきた会話が、あの“孤独”と“孤立”的話でした。その話を聴いて、とても感動しました。

わたしは、孤独になるということを、大変悲しいことだと、それまで信じてきました。でも、よく考えると違うんですね。1日の中にだって、孤独になる瞬間があります。中学時代のとき、夜、布団に入り、目をつむると、そのまま目をさますことがないんじやないかと不安になったことがあります。そのときから、死について考え始めたように思います。死を考える時、人は孤独感を強く感じます。ひとり、自分の心臓の鼓動を感じ、ああ生きているんだと思うときだってあります。孤独になってこそ、自分の弱さを感じ、強く生きたいと願い望んだりもするのです。孤独をごまかして、SNSで“寂しいよ”と、24時間、片時もスマフォを離さずメールをやりとりしている若者達をみると、『孤独になれ！』、『孤独から逃げるなって！』って言いたくなるのです。

先生がわたしに話した時から、孤独になるということは、決して悪いことではないと思うようになりました。

「先生は、どうしてこんな学校改革ができるのですか？」と、聞いてみました。

大瀬先生は、いつもの穏やかな笑みを浮かべたまま

「私は命をかけてますから」と、こともなげに答えるのです。

小学校を訪ねて3年後。大瀬先生が亡くなりました。

実は、あのときすでに病魔が体をむしばんでいたのです。

人生は旅です。いつか必ず旅は終わります。でも、死を目の前にしている先生にとって“いのち”という教材はあまりにも過酷なものだったでしょう。この授業を通して子ども達の心に受け継がれたものは、大瀬先生がふりしぶって見せてくれた孤独の力なのかもしれません。



中学時代は孤独との出会い、孤独との折り合いのつけ方を見つける時代です。

ときどき大瀬先生の言葉を頭の中で噛みしめる最近です。

きりとり

ご意見・ご感想をお願いします。

メールでご意見をいただいても構いません。Shinyatk1616n@yahoo.co.jp